

まえがき

「特攻隊とは何であつたのか」という設問に対して、今まで様々な回答が出されてきましたが、その根底にあるべきは、当時の特攻隊員自身が特攻をどう考えていたか、ということです。たとえば二十三歳で特攻散華した市島保男は、

「人間は死するまで精進しつづけるべきだ。まして大和魂を代表する我々特攻隊員である。その名に恥じない行動を最後まで堅持したい」と日記に書き留め、同じく二十三歳で散華した佐藤新平も、

「空中戦士として最高の名誉たる特別攻撃隊に採用されし我々は、大きな矜持きやうじのもとに行動を律する様に。日々のあの行動が大きな戦果を生んだのだと言われない」

という上官の言葉を肝きまに銘めいじて、特攻魂を練りあげました。またその一方で、同じく二十三歳で特攻散華した大塚要は日記に、

「我々、特攻隊員たる故に、世にあまへてはならぬ。我々は凡人にすぎぬ。空中勤務者たるもの、然しかなり。(中略)特攻隊員も、でない軍人も何等変る所はない。特攻隊員たる故に特別に扱はれるのは心苦しい次第。軍人は誰でも同じではないか。命令、任務。ただそれだけだ」

と記し、また二十二歳で特攻散華した溝口幸次郎は、

「私は誰にも知られずと死にたい。無名の幾万の勇士が大陸に大洋に散っていったことか。私は一兵士の死をこのうえもなく尊く思う」

と日記に書き残しました。またさらにいうなら二十六歳で特攻散華した佐藤章は妻への手紙の中に、「子供も、唯堂々と育て上げてくれ。所謂偉くすることもいらぬ。金持にする必要もない。日本の運命を負って地下百尺の捨石となる男子を育て上げよ。小生も立派に死んでくる」と書き残しました。これらの文章を心読すれば、特攻隊員の純粋な心模様を自ずと感得できると思います。いわば特攻隊の若者たちの真情を知ることとは、日本人のもつとも美しいまごころを知ることには他ならないのです。ことに彼らが例外なく堅持した自己犠牲の崇高な精神は、外国人にも非常に大きな感銘を与え、様々な書物に特攻隊絶讃の文章が書き残されています。たとえば『神風』という著書を持つフランス人作家ベルナル・ミローは、特攻を「偉大な純粋性の発露」であるとし、それを敢えて行なった日本人は「人生の真の意義、その重大な意義を人間の偉大さに帰納することのできた、世界で最後の国民」であると規定して、特攻について次のような評価を下しています。

「たしかに我々西欧人は戦術的自殺行動などという観念を容認することができない。しかしまた、日本のこれら特攻志願者の人間に、無感動のままにいることも到底できないのである。彼らを活気づけていた論理がどうであれ、彼らの勇氣、決意、自己犠牲には、

感嘆を禁じ得ないし、禁ずべきではない。彼らは人間というものがそのようであり得ることの可能なことを、はつきりと我々に示してくれているのである」

そしてミローは特攻隊に関する取材を重ねるにつれ、特攻隊員のほとんどは、「最も愛情深く、高い教育を受け、すれてもひねくれてもいず、生活態度の清潔な青年たちであった。そして両親に最も満足を与えていた存在だったのである」として、特攻隊員の心情を次のように分析しています。

「ほんのひとにぎりの狂燥的人間なら、世界のどの国にだつてかならず存在する。彼ら日本の特攻隊員たちはまったくその反対で、冷静で、正常な意識をもち、意欲的で、かつ明晰な人柄の人間だったのである。多くの特攻隊員たちの書き残したもので、彼らを知る人々の談話の中からうかがい知られる勇氣を秘めたおだやかさや、理性をとまなつた決意というものもまた、彼らの行為が激情や憤怒の発作であったとする意見を粉碎するに十分である」

そしてミローは特攻隊について次のように総括しました。

「彼らの採った手段があまりにも過剰でかつ恐ろしいものだったにしても、これら日本の英雄たちは、この世界に純粋性の偉大さというものについて教訓を与えてくれた。彼らは一〇〇〇年の遠い過去から今日に、人間の偉大さというすでに忘れられてしまったことの使命を、とり出して見せつけてくれたのである」

自己犠牲の行動は、それを行なう者の心の中に無私、利他の純粹精神が厳存しなければ実行不可能であり、特攻隊員がいかに無私、利他に徹していたかは、彼らの遺書、遺詠、遺稿を読めば、自ずから明らかとなります。

そこで本書は、特攻隊の若者たちの遺書、遺詠、遺稿を収録した十冊の本を紹介します。この十冊はいずれも名著というにふさわしく、単に特攻隊員の遺稿集というに留まらず、巧まざりとも美しい日本人論を展開しているといっても過言ではありません。

この十冊の本に掲載された特攻隊の若者たちは全員が散華しているのですから、これほど悲風蕭々とした哀切な書は類を見ないのですが、逆にこの十冊の本ほど、生きる喜びや平和の尊さを秘そやかにではありませんが、力づく謳い上げている書もありません。いわばこの十冊の本は、戦争という人類にとって最大の悲劇の中で、人間性の尊厳というものを世界の精神史に鮮烈に刻みつけた類い稀な愛と希望と祈りの書ということもできるのです。

戦争と平和は不可分な関係にあり、戦争を知らずに真の平和が語れるはずありません。それゆえ日本人にとって特攻の本質を知ることとは、戦争の悲惨さを知ると同時に平和の尊さを知ることにもつながり、日本の場合、特攻こそ戦争と平和の二つながらを象徴するもつとも重要な歴史モニュメントということができるところです。